

右十月八日の日附は明治何年のことであらうか、恐らく明治二十八年でなかつたかと思ふ。幼稚舎生全體を思ふ師父の慈愛、能くこの一書に現はれてゐるではないか。書中に『宅の子供兩人』とあるは、先生の四男福澤大四郎君と孫の中村愛作君とを指して云つたのであつて、之を當時の模様を知れる、幼稚舎の教師であつた長谷川敷衡氏に聞くに『朝五時に先生自ら大四郎さんと愛作さんを、道場に送り届けて歸られたことは毎度のことであつた。殊に愛作さんは、小さい時蒲柳の質であつたが、段々立派な體格になつたのは、全く柔道のお蔭である』と言つてゐる。兩君は後に本塾柔道部の部員となり、中村君はその筋骨逞ましき體格を以て、柔道部の興隆時代を背負うて活躍し、今では六段になつてゐる。

尙福澤先生の柔道に對する態度に就ては、明治三十四年史の部『福澤先生の逝去』の項に於て述べることにする。

— 初期の本塾柔道史

(一) 柔道部成立以前の時代

幼稚舎は、序論に於て述べたるが如く、舎長に適任者を得たると、其人が武藝の達人であつて、自ら手を取つて少年者を導かれたが爲に、明治九年以來柔術が生徒の間に行はれたのであるが、本塾柔道の沿革に關しては、明治二十五年に至るまで、何等の記録も存してゐないのである。然らば本塾の青年塾生の間に、柔術にしろ柔道にしろ、それ迄行はれてゐなかつたかといふに、亦大に然らざるものがある。本部史を編纂するに當つて、編者が先輩の間を歴訪して得たる資料に依れば、其淵源は遠く幼稚舎道場の設立後間もなき時代にまで溯る。

塾の三田時代の初期に、柔術の心得ある者、若くは新に之を修業せんとした者は、皆幼稚舎の道場に押掛けて行つて、和田氏の柔術を稽古したのである。明治十年頃既に塾の教師をして居られた鎌田先生も亦其一人であつて、他に今は故人となれる永田一二といふ大人塾生も、其仲間に加はつてゐたといふ(『十八景』鎌田先生談参照)。兎に角五十五六年も以前のことであるから、邈として詳にするよすがないが、今から想像すれば、最初の約十年間、柔術稽古の志望者は、各自に又断續的に幼稚舎の道場を利用したのである。

降つて明治二十年になると、本塾學生の間に新しい講道館の柔道が頭を擡げて来て、それが幾分組織的な形の下に行はれることになつた。即ち柔道の俱樂部が設けられて、講道館流の稽古が始まられたのである。これは柔道ばかりでなく、當時一般の體育に對する風潮が、學生の間に昂ると共に、種々のゲームなりスポーツなりが、學生間の協力に依りて、稍稍統制ある俱樂部なるものの中に、發達するに至つた時代である。謂はゞ、體育の俱樂部時代とも言ふべきものが出現したのであつて、ベースボール俱樂部、端艇俱樂部等の生れたのも略ぼ其頃のことである。

この我が慶應義塾に於ける講道館柔道の始期に就ては、實は初めより何等の記録なく、又先輩諸氏を訪問せる際にも、其意見區々として一定せず、一時は殆ど五里霧中に彷徨する感があつた。然るに其後俱樂部時代の部員であつた現昭和銀行頭取生田定之氏に面會せるに、同氏は柔道俱樂部なるものの起源を明治二十年と言つて居り、又福岡の元代議士大原義剛氏は『私が塾に入ったのは明治二十一年で、その前年頃から塾生の間に講道館柔道が始まつてゐた』(『懷舊談参照』)と語られたので、霧中彷徨裡に一道の光明を得たものの、更に之を確める爲めに、編者は吾人の最も古き先輩にして、柔道部の草分とも云ふべき當時の指導者南摩綱夫氏を訪問したのである。南摩氏が塾に居られたことはこれ迄耳にしてゐたが、ただ南摩といふのみにて一切が不明なりしころ、これも生田、大原兩氏に面會の結果、其名の綱夫なることが始めて明かにされたのであつた。

南摩氏は會津の人で、明治二十二年十二月に塾の別科を卒業せられた。入塾前既に講道館二段の免許を有してゐたといふ。編者一日同氏を下落合の閑居に訪れたるに、家人の語る所に據れば、同氏は七八年前より中風に罹り、今猶靜養中であつて、口が廻らぬ故面會しても得る所なからんといふ事であつた。併し一應主人に來訪の旨を通ぜられんことを乞ひたるに、會はうと頷かれた由にてその病室に通さる。初對面の挨拶の後編者は來意を告げたるに、病床の氏はその温顏に笑を湛へて喜ばれた。氏は今年六十八歳、年齢相應の老體ではあるが、多年病魔に悩まされて來た人としては元氣に見受けられ、顏容正しく血色として悪からず、又頭腦も明晰にして記憶力はあり、間に應じて直ぐに對へたいやうな風であるが殘念なことには自ら言はんと欲する所を語る能はざる容體であつた。編者は家人の援けを藉りて漸く話が判るやうな次第であつて、三田に於ける柔道の起源に就て、能く念を押して訊ねたるに、家人に命じて石盤を取り寄せ、之に危かしい手附きながら左手にて「廿年」と瞭然り書いて示されたのである。されば我が柔道部の押々の起源を、前記三氏の説に據り明治二十年なりと斷じて誤なしと信ずる。この他に當時の事情を知れる者としては、小南英策氏ならんも、同氏も亦老齡にして多年藥餌に親しみ、人との面會を好まざるが如く、編者は數ヶ月に亘りて再三訪問せるにも拘らず、遂にその聲咳に接するの機なく、又其間數々書面を以つて照會する所ありしが、之に對しても何等満足なる返信を得るに至らなかつた。

當時本塾には未だ專屬の道場が無かつた時代であるから、塾の柔道志望の青年有志者等は、矢張り幼稚舎の道場を借用して、晚方から稽古したのである。併しこの時は以前と異り、その修業の流派は前述の如く、幼稚舎の關口流とは全然別個のものであつて、その頃旭日昇天の氣運に向つて來た講道館流が學生の心を捉ふるに至り、塾生の中既にその技能に達したる者が指導者となりて、有志者の一團に始めて之を教へたのである。

明治二十年より二十五年頃迄の間、幼稚舎の道場で、講道館流柔道を稽古した者の顔觸を見るに、指導役には二段の南摩綱夫、及び小南英策の二氏あり、部員には生田定之、濱口擔、大原義剛、武佐吉、上野勘助、北代達枝、吉田虎太郎、

佐藤英太郎、高木利平、佐々木正、飯塚國三郎、平岡良助、山本久三郎、成瀬正行、小林清一郎、河村寛裕、青木徹二、柴田美穂、高井龜吉等の諸氏の名を擧ぐる事が出来る。而してこの時代に、斯界の巨頭山下義韶氏を迎へて教師となし、三田山上柔道發展の基がこゝに開かれたのである。

(二) 柔道部成立後の最初の時代

我が柔道部の有史以前は、前述の如く、希望者が各自に幼稚舎の道場に通つて、關口流柔術を稽古した明治十年頃の時代より、明治二十年以後有志者集まりて俱樂部を組織し、幼稚舎道場を利用して、講道館流柔道の練習を始めた時代を経て徐々に發展の道程を辿つて來たのであるが、その内に資金を有志の醸出に得たか、又は塾より支出を仰いだか、詳かでないが(大原氏の話に依れば體育會費を徵收することにして塾の方で建てたのだといふ)、兎にも角にも明治二十五年に至つて、舊演説館の西裏に道場を新築することになつた。

道場の建物は四間に九間、南と西側に見物席を一段高く廻らし、疊敷は初め僅に四十疊位に過ぎなかつた。今から見れば無論微々たるものであるが、當時に在りては都下有數の立派な道場であつた。併しこれは剣道部と協同の使用に供されてゐたので、午後竹刀の音が消える五時頃から、毎晩此處で部員の勇ましい稽古が行はれたのである。

時恰も塾内に、福澤捨次郎氏を會長とする體育會が設立されたので、柔道の俱樂部であつたものが其の一部に屬して柔道部となり、部長には大先輩濱野定四郎氏を戴き、師範には斯道の大豪山下義韶氏あり、幹事數名を置き、茲に名實共に具はつた柔道部の成立を見るに至つた。

柔道部の成立と共に、部員の等級が設けられ、寒稽古、大會、紅白勝負、月次勝負、活法の教授、技術の研究會等、今

日部の年中行事となつてゐる種々の催しが、既にこの時以來行はれるやうになつた。等級は甲乙丙の外、その上を四級より一級までとなし、四級以上は黒帯者と稱せられ、中々勢力あるものであつた。幼年の方は五級に區別されてゐた。

大會は春期に之を行ひ、當時豪の者捕ひを以て鳴つてゐた警視廳、講道館、北辰館、明治義會其他諸學校から斯道の選士を招待して、技を闘はすの例が既に開かれた。勝者には何れも賞品を授與したが、その賞品の中には、今の吾々より見て美望に堪へないものがあつた。それは即ち福澤先生が柔道の眞髓を道破された成語『心身之順是柔道』を染め出した袱紗である。これは大會を祝さんとして、先生の書かれたものであるが、それが何年の大會の時であつたのか、今正確に知ることは出來ない。或者は道場が新築されて第一回の大會があつた明治二十五六年ならんと云ひ、又或者は二十七八年頃ならんとも云つてゐる。兎に角二十七年四月に卒業された河村寛裕氏、同年に入塾して後に黒帯者の鉢々たる者となつた須藤久藏氏も亦この袱紗を受けられたと云へば、それがその頃二三年の間、賞品として、月桂冠を得べき者に與へられたことは疑ひない。その原本の行衛は不明なれども、それと同じものの一つが今山下先生の許に秘蔵されてゐる。

明治三十年前後柔道部に於て活躍してゐた重なる人々を擧ぐれば濱貞男、田村茂登馬、石渡迪、加藤直法、大島光四郎、平野勝次郎、久保勝之進、増倉啓次郎、山本魯一、肥田玄次郎、麻生誠之、須藤久藏、神林光正、福澤三八、櫻井三治、守田尙記、牧口義矩、多賀武次郎、柴田一能、金澤冬三郎、諸遊慎吉、島津理左衛門等の諸氏が數へられる。

(三) 講道館柔道

明治維新の前後、銃砲火薬の輸入が我が國古來の戰術を一變せしめ、新日本の進むべき針路が其の方向を一轉すると共に、國民舉つて俄に西洋文化の吸收に心を向けた爲め、元和寛永以來武藝華やかなりし時代は、槿花一朝の夢の如くにし

て過ぎ去つた。

昨日までは二本差しの威風四邊、拂つた武士も、今は帶刀を捨て、丸腰とならなければならなかつた。そればかりではない、家祿の代償として多少の公債が與へられたにもせよ、之のみにては一家の生計を立つるに足らず、前に蔑視したる町人の間に伍して、錙銖の利を争はなければならなかつた。隨つて一般の武藝は凋落して人之を顧る者なく、幼稚舎に聘せられた名家の出、關口柔心氏も、人力車夫にまで成下つてゐたといふことを見れば、時勢の變轉蓋し思ひ半ばに過るであらう。

然れども窮すれば道通す、この時早くも時代の轉向を洞察し、攻撃防禦の勝負一天張りに終始した古武藝の舊數を蟬脱して、新時代に相應しき柔道の金字塔を都下に築き上げた者がある。それは言ふまでもなく、柔術の復興者であつて講道館柔道の創唱者である嘉納治五郎先生である。

嘉納先生は初め福田八之助氏と磯正智氏とに就て天神眞揚流を、飯久保恒年氏に就て起倒流を學んだ。前者は捕縛術に重きを置き、後者は組打から脱化して相手を投げ斃すことを主としてゐた。昔の柔術の開祖と云へば、多くは自家の長ずる所、好む所の技を無上なるものとして、各々流派を樹てたのであつて、眞理悟得の點に於ては或は一に歸するなんも而も技術の一部を以つて、柔の術の全體を蔽はんとする偏狹が無きにしもあらずであつた。(今から見て斯ういふのである。凡そ物事は時代の產物であるから、眞剣を尙べる昔に於て、一流一派に偏したことも亦止むを得なかつたことである。一流の創意者たるものは、皆各々非凡なる人物であつたのだ)。然るに嘉納先生は諸流の長所を探り、東西の技をも尋ね、研鑽苦心の餘、此等の技術を整齊統一し、柔の術の奥底に潜んでゐる共通の眞理を捉へて之を柔道となし、精神上の修養(智育德育)と身體の鍛錬(體育)とを高調して、精力の善用を標榜し、明治十五年講道館柔道を組織大成し、之を國民的のものとなすに至つたのである。

昔の柔術は、主として社會の一階級を成してゐた武士の戰闘術の一部であつたればこそ、それが爲めに大に發達したりしとは云へ、又一面に於ては之のみに拘泥したるが故に、時代の進歩と歩調を一にすること能はずして、遂に破綻が現はるゝに至つたのである。併し乍ら、心身の鍛錬、士氣の作興は、如何なる時代に在つても、國民の一日も廢す可からざるものである。隨つて士道を根本とする柔術も、其應用の方面を一轉換すれば、其處にまた新たなる生命が湧いて來るのである。今日柔道の盛になつたのは、即ち國民の新たなる要望と合致するに至つたからのことではなからうか。人に先んじて帶刀を捨てたとは云へ、士魂を尚び體育を重んずること人後に落ちざる福澤先生が、之を獎勵して三田山上の華たらしめたる所以は、蓋し其處に充分なる理由があつて存するからのことであると思ふ。此の講道館柔道を塾風に化せしめて、能くその發達を圖ること、之れ部員の任でなければならぬ。

(四) 山 下 師 範

我が柔道部最初の師範山下義韶氏は、慶應元年小田原の藩主、大久保家の武藝師範役たる家柄に生まれた。武藝の道に携はること先生にて三代目なりといふ。少時嘉納先生の門に入つて修業を積み、技神に達し、彼の鬼横山氏と相並んで柔道界の麒麟兒であつた。今は最高段の九段に列して講道館の總帥格である。塾の柔道部の基礎が築かれ、講道館柔道が今日の隆盛を見るに至りたる所以のもの、先生の力與つて大なるものがある。

先生は壯時身長五尺三寸五分體量十八貫、即ち大兵といふ程ではなかつたが、その發達せる筋肉には、柔道多年の鍛磨が現はれて居り、輕快にして神速なる技には、凄い程の銳鋒が含まれてゐた。明治十九年の春、諸流の強豪を集めてゐた警視廳と、新進の講道館との間に、他流試合が行はれた時、當時飛ぶ鳥を落すが如き勢であつた警視廳の師範格たる濱川

流の達人、二十四貫の巨大漢中村半助氏も、山下先生の足拂の妙技には三嘆を禁ぜざるものがあつたといふ。又それより十年後の明治二十八年に、平岡浩太郎氏の肝煎りで、九州柔道大會が博多の大公園で舉行された際、先生が諸流の師範又は代師範たる豪の者五六人を薙ぎ倒して勇名を馳せたことは、今猶古老人の語る所である。先生の妙技の前に當時九州に残存割據せる諸流は、悉く風靡せられ、講道館の名聲一時に高まつたのであつた。

先生が塾の有志團體の教師として、始めて三田の地を踏んだのは、明治二十二年であるが、明治三十六年米國鐵道王サミュエル・ヒル氏の招聘に應じて、其年九月渡米するに至るまでの十五箇年間、熱心に部員を薰陶せられて、三田柔道の興隆時代を現出せしめた。

米國に於ては、ヒル氏の令息の外、後には時の大統領ルーズベルト氏を始め其二娘にも柔道を教へ、時には力自慢のレツスラーと戰つて之を手球に取り、其他或はハーバード大學に於て、或は陸軍幼年學校又は海軍兵學校に於て、或は諸所の俱樂部に於て其妙技を示し、我が國武術の精華を異國に顯揚して、斯道の爲に萬丈の氣を吐いた。其弟子の一人であつた現比律賓總督ルーズベルト氏が、昨年我が國を經由して比島に赴かるゝ際、床しくも山下邸を訪問して久闊を舒したるは、外國人として珍しいことであるが、ル氏亦大國の一紳士、情あり義ある武士道の感化茲に至らしめたのであらう。先生が深く柔道の堂奥に入れるは、嘉納流祖との間に行はれる講道館古式の形が、如何に能く柔の原理を體現して、天下一品なるかを以つても知られると思ふ。